

音 楽 科

1 豊かな感性を育む音楽教育

幼い日に口ずさんだ歌は、やがて成人してからも、生活の折々になつかしく思い出されるものである。また不思議なことに、なつかしい歌を口ずさむ時、その歌を覚えたころのまわりの様子、旧友の顔など、当時の風景もいっしょに頭に浮かんでくるものである。

音楽は、人間が感じ取ったときに初めて命を得るものであるといえる。すなわち、聴いて感じた以上の音楽表現はあり得ないわけで、音楽教育においては、子ども自身の心で感じることを学習の出発点となると考えている。つまり、音楽学習は、内面から外面へと導くことを基本とし、そのために、自ら感じ、気づき、考え、表現していくといった4段階の学習ステップを設定した。いいかえれば、豊かな感性を育む音楽教育とは、楽しさを感じながら自分なりの音楽を創り出すことであると捉え、自分なりの音楽を創り出すとはすなわち、感じ、気づき、考え、表現することであると考えた。このような児童の姿を育むために、どのような支援があるべきかについて、これより探っていきたい。

2 豊かな感性を育む支援の基盤とは

本校では、感性を価値あるものに気づく感覚であると捉えている。この感覚は、能動的態度がその基盤になくってはならない。音楽科においては、まずこの基盤となる能動的態度がどの程度まで育まれるか。そして、どのような評価がそのことに対して与えられるかが重要である。それには、子どものよさをよさとして感じ取れる教師の感性が問題となってくる。

例えば、ある合唱曲を子どもに示し、響き合うハーモニーをつくっていきましょうというめあてで学習を進めているとしよう。音とりもすみ、いよいよ各声部を合わせて合唱するのだが、どうもうまくいかない。そこで、その合唱曲を歌っているCDを何枚か用意していろいろな歌い方を聴いて試してみる。「ああ、この歌い方がいいなあ」「こんな風に表現してみたい」「この歌い方は曲の感じがよく出ているなあ」などと児童自身が価値あるもの（音楽のよさや美しさ）に気づき、感じる活動を通して、自分たちの表現をふりかえれば、さらによい表現について考え（新なる学習のめあてづくり）、そしてさらな

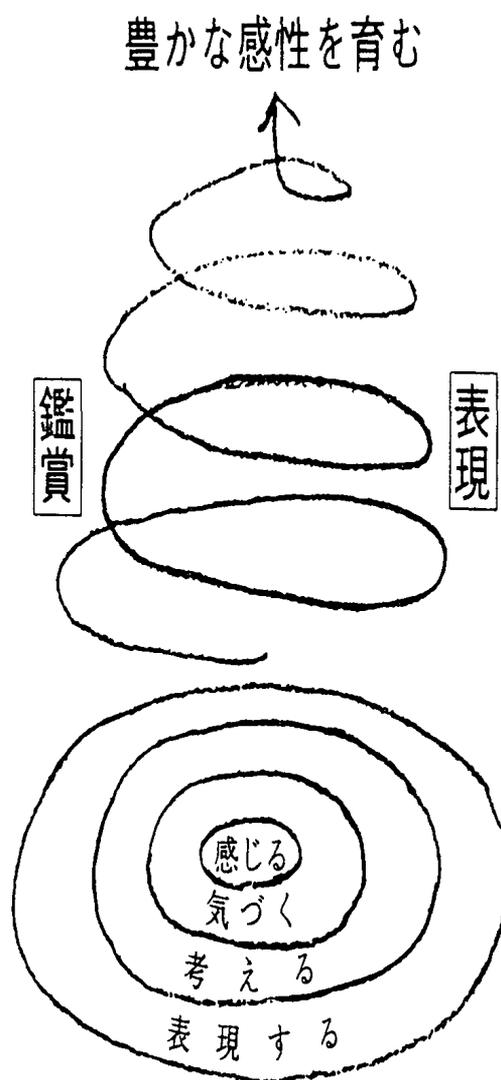
る高まりへと向かうことができるであろうと考える。

その根底にあるのは、次のような、児童観についての仮説である。すなわち、児童は誰もがいろいろなことをしてみたい、楽しみたい、喜びを味わいたい、つまり、よりよく生きたいという欲求を持っているであろう。その欲求が、内発的なめあて意識（適切な動機づけ）などによって誘発（気づき、感じること）されれば、より豊かな表現について考え、自らの感覚を磨きながら高まっていくであろうということである。

そのような、児童の感性を教師がどう捉え、何に感じ、気づいて、どのような方法で育んでいこうとしているのかを明確にしておくためにも、教師自身の感性が重要になってくる。まさに、この教師の感性こそが、子どもの豊かな感性を育むための基盤となると考えるのである。

3 豊かな感性を育む支援

表現の中には、おのずから感じたことや気づいたことが含まれており、表現しながらあらためて、そのよさを深く感じたり、あるいは物足りなさを感じたりするものである。また、表現してみて初めて自分の課題が明らかになったり、具体的な改善案を発見したりすることも多い。このように「感じる」「気づく」「考える」「表現する」ことは、それぞれ切り離すことはできないものであり、互いに関連し合って質的に変容していくものであるといえる。また「ひらめき」のように感じ・気づいたことがすぐに表現と結びつく場合も少なくない。そこで、ここでは子どもの「感じる」「気づく」「考える」「表現する」姿を具体的に捉え、支援の在り方を考えたい。



第Ⅲ章 豊かな感性を育む授業実践

	様 相	支援の手だて
感 じ る	<ul style="list-style-type: none"> ・ 楽しさ, 美しさ, 心地よさ ・ 解放感 ・ 好き, 嫌い ・ 心に浮かぶ, 想像する, 漠然としたイメージをもつ ・ みんなといっしにする楽しさ ・ 達成感, 成就感 	<ul style="list-style-type: none"> ○ よさが感じ取れる音楽との出会わせ方を工夫する。 ・ 範唱や範奏, CD, 視覚的な資料 ○ 音楽を聞いて動いたり, 模倣したり, 感じたことを出し合う場を設定する。
気 づ く	<ul style="list-style-type: none"> ・ 音楽の構成要素との関わり (リズム, メロディ, 重なり, 音色, 強弱, 速さ, 沈黙…) ・ 音楽の背景 (歌詞, 歴史, 生活, 情景, 作曲者, 感情, 気持ち…) ・ 具体的なイメージをもつ ・ 注意して聴く, 意識的に聴く ・ 互いや自分の高まりやがんばり 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 歌詞や旋律などを手がかりにイメージを広げていく働きかけをする。 ・ 発問, 資料の提示, 共感的なことばかけ ○ リズムやメロディ…などポイントをしばった表現や鑑賞の場を工夫する。
考 え る	<ul style="list-style-type: none"> ・ イメージに合った表現を考える。 ・ 選ぶ ・ 探す ・ 工夫する ・ イメージに照らして表現を振り返りよりよい表現を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 感じたことや気づいたことをもとに表現し, イメージに照らしてよりよい表現になる方法を考えたり, 試したりする場を設定する。 ○ 選ぶ, 探す, 工夫する活動を取り入れる。 ○ 感覚的, 技能的, 知的なめあてがもてるような工夫をする。 ・ 鑑賞, 録音, ことばかけ
表 現 す る	<ul style="list-style-type: none"> ・ 模倣して表現する。 ・ イメージを持ちながら表現する。 ・ 自分なりに工夫して表現する。 ・ 互いに工夫しながら表現する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 安心して表現できる場づくりをする。 ○ 工夫する観点を明確にする。 ○ 表現方法や表現技能を積み重ねていく。

4 豊かな感性を育むためのてだて

(1) 内発的なめあて意識の形成

音楽科で捉えためあて意識の形成とは、児童自身が心を動かされ、音楽のよさを感じて、音楽へ向かおうとする気持ち（主体的なめあて）を持つことである。内発的なめあて意識が形成されれば、児童の主体的な活動が期待できるであろうと考えている。

そのためには、よさを感じることができる教材との出合わせ方や、子どもが見通しを持って活動に取り組めるように指導の工夫を行いたい。また、豊かに感じたりイメージを広げるためのてだてとして、新鮮な教材の研究や教材・教具の価値の吟味、教材・教具の提示の工夫、音楽的環境の整備、具体性のある発問の工夫などが重要であると考えている。

(2) 児童一人ひとりのよさを見いだす共感的評価

活動に取り組む児童の姿から、一人ひとりのよさ（子どもの持ち味）を見だし、個々に対する認めや励ましができる教師でありたい。児童の表現から音楽的な評価はもちろんのこととして、発言やつぶやき、態度、行動に至るまで、その人間をまるごと受けとめ共感し、認め励ましていくといった、人間としてのよさや可能性も含めた総合的な評価の視点をもって授業を進めたい。そして、音楽を通して、子どもの中で変容しつつあるものを、リアルタイムで子どもの姿から捉えて評価していく姿勢を特に大切にしたい。

そのためには、一単位時間の授業だけで児童を評価していくのではなく、長期に亘る継続した評価活動が必要となる。また、児童の実態にあわせてフレキシブルに教師が反応し、指導計画を修正していくことも心掛けたい。

(3) 児童一人ひとりの感じ方や思いが生かせる場の創造

人は誰でも皆、自分と違う。その違うもの同志が音楽を通して心をかよい合わせ、集団で学び合い、認め合い、集団で触発され合う中で個が伸びていくのが音楽であると考えている。すなわち、子どもの意志が素直に表現できる雰囲気作りが基盤となり、豊かな感性が育まれる授業が成立していくのではあるまいか、そのためには、互いに安心して打ち解けて表現し合える暖かい集団作りが重要である。音楽教育とは、音楽性の基礎を培うこととともに、時が過ぎ、やがてそれが思い出となったときに、何かしらその時のことを思い出すと心の中が暖まるといったよい思い出を心の中に残すことも、重要なことであると考えているからである。